

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00634

研究課題名(和文) 講義の談話の理解におけるパラフレーズの研究

研究課題名(英文) Research on paraphrasing in the discourse of university lectures for the purpose of students' comprehension

研究代表者

宮澤 太聡 (MIYAZAWA, Takaaki)

中京大学・文学部・教授

研究者番号：90579161

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：人文科学系講義2編(講義G・H)の談話を対象に、主題段(講義の中心的な内容の段)の情報がどのように要約文に表現されるか、講義の談話に特徴的な話段の情報がどのように要約文に表現されるかを、「情報伝達単位(CU)」(佐久間まゆみ2006等)に基づき、詳細に分析した。については、要約文の主題段の表現方法のパターンから、講義の談話の理解のし方が異なる可能性があることを見出した。については、日本人大学生と外国人留学生との間に差がみられることがわかった。文章・談話レベルでのパラフレーズについての特徴が明らかになってきたため、論文化を目指したが、十分な検討ができず、それが果たせなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

同一のインプット(2編の人文科学系の講義の談話)に対して、日本人大学生72名、留学生126名(中国語母語話者、韓国語母語話者各63名)の要約文の表現類型を情報伝達単位(CU)に基づいて分析することで、各受講者の要約文の表現のし方(パラフレーズ)だけでなく、そもそも理解のし方が異なっている可能性があることを、客観的に提示できたことは意義があると考えられる。また、個人差が認められるが、日本人大学生、中国人・韓国人大学生を集団として捉えたときに、表現類型に一定の傾向が認められることも明らかになった。母語の特徴や教育の影響など様々な要因が考えられるが、講義理解の教育の基礎的研究として位置付けられる。

研究成果の概要(英文)：This study conducted a detailed analysis of how information from the main segments (the central content segments) of two Humanities lectures (Lectures G and H) is represented in summaries, and how information from segments characteristic of lecture discourse is expressed in summaries, based on "Communicative Units (CU)" (Mayumi Sakuma, 2006, et al.).

I. Regarding the main segments, the analysis of the expression methods in the summaries revealed certain patterns in how the lectures are understood by the participants.

II. Concerning the characteristic discourse segments, it was found that there are differences between Japanese university students and international students. Although the characteristics of paraphrases at the discourse level became clearer, the attempt to write a paper on this subject was not successful due to insufficient examination.

研究分野：文章・談話論

キーワード：日本語教育 講義の談話 表現と理解 パラフレーズ 要約

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、大学学部留学生(以下、留学生)による日本語の講義理解のための有効な方法の提案を目的として、研究協力者である佐久間まゆみ早大名誉教授が1986年以來の要約文の共同研究を端緒に2001年度より継続してきた共同研究の発展的課題である。

これまで、日本語母語話者の学部大学生(以下、大学生)と留学生対象の3種の講義の理解データである受講時のノート、受講後の要約文とインタビューの理解調査の結果から、留学生は、講義の全体的構造の「談話型」とその構成要素の「話段」の理解とその「文章型・談話型」と「文段・話段」の表現が十分ではないという「要約力」にかかわる問題があることがわかった。

従来の講義の談話(原話)のどのような情報が要約文に残存するのかという観点からの分析は、原話の表現特性を解明する点で成果を上げてきたが、大学での講義理解は、講義者の意図を適切に理解するだけでなく、成績評価にかかわるコメントシートやレポートのように、その内容を自身で再構成し、講義者にわかるかたちで口頭・文字表現によって適切にアウトプットすることまでを求められることがある。講義を受講して理解した内容をひとまとまりの情報として適切に表現することは、成績評価という観点からも重要である。

そのため、本研究は、個別の理解データ自体の表現分析を通して、それぞれの受講者が理解した講義の談話をどのように表現するのかを「情報伝達単位(CU)」「(佐久間まゆみ2007等)」に基づき分析することで、特に留学生の理解した内容を文章として表現(パラフレーズ)する際の問題点を明らかにすることを旨とする。

2. 研究の目的

本研究は、日本語母語話者の学部大学生(以下、大学生)と学部留学生(以下、留学生)による日本語の講義理解の実態把握の比較を行うため、受講者が講義をどのように理解して表現したかを、佐久間まゆみ編著(1989)以降の要約文研究の成果に基づく方法論を用いて分析する基礎研究である。

大学での講義理解は、講義者の意図を適切に理解するだけでなく、その内容を自身で再構成し、講義者にわかるかたちで口頭・文字表現によって適切にアウトプットすることまでを求められることがある。

ここでは、「情報伝達単位(CU)」という文章・談話の分析単位を用いて、講義の言語表現が大学生と留学生の受講後の要約文にどのように表現されているかを分析・比較することで、特に、留学生が抱える「理解した講義内容を表現する際の形態的な問題点」を明らかにすることを旨とする。

3. 研究の方法

人文科学系講義2編(講義G・H)の談話を対象に、(1)主題段(講義の中心的な内容の段)の情報がどのように要約文に表現されるか、(2)講義の談話に特徴的な話段の情報がどのように要約文に表現されるかを、「情報伝達単位(CU)」に基づき、詳細に分析した。

(1) 主題段(講義の中心的な内容の段)の情報がどのように要約文に表現されるか

原話HのどのCUが要約文のどこにどのように表現されているのかを分析して、受講者の講義理解の実態の一端を明らかにするために、原話Hと各要約文の残存認定作業の結果を集計済みの共同研究のデータ(以下、「既存のデータ」と称する)を使用する。具体的には、HYJ 23名、HYK 13名、HYC 12名分の要約文を対象として分析する。原話Hの総CU数が6,781CUで構成されているのに対し、要約文は約180CUで構成されており、約2.7%の縮小率である。

本稿で扱う要約文のZ単位の残存形態について、3つの集団別に【表1】にまとめる。

【表1】要約文における講義Hの原話のCUの残存傾向

	全体	HYJ	HYK	HYC
ZG	695(5.5%)	436(7.6%)	154(4%)	105(3.5%)
ZP	7,669(60.8%)	3,915(68.2%)	2,267(58.5%)	1,487(49.6%)
ZE	948(7.5%)	55(1%)	435(11.2%)	458(15.3%)
P	2,491(19.8%)	1,198(20.9%)	703(18.2%)	590(19.7%)
E	804(6.4%)	133(2.3%)	313(8.1%)	358(11.9%)
計	12,607(100%)	5,737(100%)	3,872(100%)	2,998(100%)

佐久間編著(2010等)による講義の談話のCUによる残存認定作業において、「Z単位」は、ZG(原話のCUがそのままの形で残存する)、ZP(原話のCUが言い換えられて残存する)、ZE(原話のCUが誤った形で残存する、下位分類としてEC:内容の誤り、EX:表記の誤り、EXC:内容と表記の誤りを設ける)、P(原話にはないCUが付加される)、E(原話にはない誤ったCU

が付加される)の5つの残存形態の認定が行われている。

講義 H は、配布資料が1枚あるのみで、基本的に音声と板書による情報伝達であることから、調査協力者は受講時のノートと各自の記憶を頼りに要約文を作成することになる。そのため、全体を見ると、ZG は約 5% となっており、原話の CU がそのままのかたちで要約文に残存することは非常に少ないことがわかる。それに対し、ZP が約 60%、P が約 20% と原話の CU を言い換えた Z 単位が合わせて約 80% を占めている。このことから、講義 H の要約文は、ほぼ原話の情報をパラフレーズして表現していることがわかる。

また、ZE と E も合わせて約 15% となっており、表現・内容に誤りが見られることがわかる。ただし、ZE と E を 3 つの集団別にみると、HYJ が約 3%、HYK が約 19%、HVC が約 27% と日本語母語話者と非母語話者との間に大きな差があることがわかる。この ZE、E の差は、ほぼ ZP の差と対応している。

さらに、ZG、ZP、ZE の合計から、講義の原話のどの情報が残存しているかが特定できる CU が約 70% となっていることがわかる。

本研究は、要約文の全体構造の分析(大文段)の分析とすでに研究成果として報告されている残存認定単位の分析を組み合わせ、受講者が講義の談話の全体構造をどのように理解・表現しようとしたのかを類型化を通して明らかにする。具体的には、以下の 3 点を行う。

1. 要約文の内容と表現の分析から、大文段(「 . 開始部」・「 . 展開部」・「 . 終了部」)を認定する。
2. 要約文の「 . 開始部」と「 . 終了部」に残存する原話の CU を手掛かりに、要約文の「 . 開始部」と「 . 終了部」の表現を類型化し、3 つの集団における傾向を検討する。
3. 要約文の「 . 開始部」と「 . 終了部」のタイプの組み合わせによって、要約文の全体造と原話 H の全体構造の比較を通して、受講者が原話 H をどのように理解したのかを検討する。

(2) 講義の談話に特徴的な話段の情報がどのように要約文に表現されるか

原話 G のどの内容が要約文に残存し、どのように表現されているのかというパラフレーズの実態を明らかにするために、原話 G と各要約文の残存認定作業の済んだ共同研究のデータを使用する。

原話 G の膨大な内容が要約文にどのようにパラフレーズされるのかを明らかにすることが目的であるが、ここでは、その一端として、講義の談話の一部を対象として、ある現象を具体例とともに説明する原話 G の話段の内容が要約文にどのようにパラフレーズされるのかを明らかにする。具体例を含む話段で、話段同士がある程度複雑な多重構造を有しており、要約文に比較的残存することから、原話 G の話段 6.6 を対象とする。話段 6.6 は、小話段 6.6.1~6.6.6 からなり、全 25 文、全 354CU から構成されている。佐久間研究代表者(2015)より、話段 6.6 の箇所を抜粋する。

- 6.6 年代による親族呼称の変化(スライド 12) 文 417~441
- 6.6.1 年代による親族呼称の変化の予告 文 417~418
- 6.6.2 男子から両親への呼称の変化 文 419~420
- 6.6.3 男子から両親への呼称の変化が起きる理由 文 421~427
- 6.6.4 女子から両親への呼称の変化が起きない理由 文 428~432
- 6.6.5 「おやじ」と「おふくろ」の非対称性 文 433~438
- 6.6.6 年代による親族呼称のまとめ 文 439~441 (pp.26-27)

残存認定作業が済んだ GYJ 72 名、GYK 34 名、GYC 33 名分の要約文における原話 G の話段 6.6 の情報が残存する文を対象として分析する。本稿で扱う要約文の具体的な統計量については、【表 2】を参照。

本研究では、原話 G と 3 種の集団の要約文を対象に、3 種の方法で分析する。

1. 原話 G の話段 6.6 のどの CU が 3 種の集団の要約文 GY に残存するかを明らかにするために、残存認定作業後のデータを用いて分析する。データにおける残存認定単位は、一つの要約文に同一の原話の CU が複数残存することがあるため、特定の原話の残存数が 100% を超える場合がある。特定の原話の CU が残存した人数を明らかにするために、各要約文に同一の原話の CU が複数残存した場合は 1 として数える(異なり数)。
2. 3 種の集団別の要約文がどのような CU で構成されているかを明らかにするために、原話 G の話段 6.6 の CU が残存する要約文の文を対象に、当該の文がどのような CU で構成されているのかを分析する。具体的には、原話 G の話段 6.6 の CU、話段 6.6 以外の原話 G の CU、原話にない CU、原話にない誤った CU に分類する。この分析では、既存のデータの残存認定単位を話段の情報に読み替えることで、視覚的にも要約文の構成をわかりやすくした。
3. 原話 G の話段 6.6 の内容がどのように要約文にパラフレーズされているかを明らかにするために、方法 1 と方法 2 から分析した要約文に表現される特徴的な内容を「概略 - 詳細」の観点から配置し、各要約文にそれらの内容が表現されているかどうかを分析し類型化する。そのうえで、量的に典型的な類型を各集団から一つずつとりあげ、CU の観点から質的

に分析する。要約文のCUの分類は、本稿で新たに付したものである。
 以上の三種の方法によって、話段6.6という限定された範囲についてはあるが、原話Gの情報
 が要約文にどのようにパラフレーズされるのかを明らかにする。

【表2】3種の集団の要約文におけるCUの特徴

要約文の情報伝達単位 (CU)	GYJ	GYK	GYC
・人数	72	34	33
・話段6.6使用者数	28	12	7
・話段6.6使用者数 / 人数	38.9%	35.3%	21.2%
・話段6.6を含む総文数	44	20	14
・話段6.6を含む文の総CU数	470 [100.0%]	210 [100.0%]	151 [100.0%]
・一文当たりの平均CU数	10.7	10.5	10.8
1. 話段6.6の残存CU数 (異なり数)	234 [49.8%]	114 [54.3%]	60 [39.7%]
2. 話段6.6以外の残存CU数 (異なり数)	90 [19.1%]	11 [5.2%]	31 [20.5%]
3. 原話にはないCU数 (異なり数)	146 [31.1%]	79 [37.6%]	53 [35.1%]
4. 原話にはない誤ったCU数 (異なり数)	0 [0%]	6 [2.9%]	7 [4.6%]

4. 研究成果

(1) 主題段 (講義の中心的な内容の段) の情報がどのように要約文に表現されるか

中括型の講義Hを受講後に作成した要約文を開始部・展開部・終了部の大文段を認定し、開始部と終了部に原話の情報がどのように残存するかを分析することで、以下の4点が明らかになった。

開始部は大きく以下の4種に類型化できる。

類型1: 原話の開始部と対応して表現されるもの

類型2: 原話の開始部と展開部をまとめて再構成して表現されるもの

類型3: 原話にない情報によって表現されるもの

類型4: 原話の開始部と展開部の1部の話段の情報を再構成して表現されるもの

特に類型4は開始部としての独立性が低い。

全体としては、開始部は類型1, 4, 2, 3の順に多い。被調査者の集団別にみると、HYKは類型4、HYCは類型2が他の集団と比較して多い。

終了部は大きく以下の5種に類型化できる。

類型1: 原話の終了部と対応して表現されるもの

類型2: 原話の終了部と開始部をまとめて再構成して表現されるもの

類型3: 原話の開始部と展開部の1部の話段の情報を再構成して表現されるもの

類型4: 原話にはない要約文作成者の感想のみで表現されるもの

類型5: 書きかけで終了部自体がないもの

特に類型3は終了部としての独立性が低い。

全体としては、終了部は類型1, 3, 5, 2, 4の順に多い。被調査者の集団別にみると、HYJは類型3、HYKは類型1が他の集団と比較して多い。

次に、被調査者集団ごとに、開始部の類型をみていく。【表3】は、縦軸に開始部の類型番号を、横軸に被調査者の集団を配置した表である。類型4は、4と4aに分かれるので、右に集計したものを示した。

まず、HYJについてであるが、類型1と類型2が約35%と多い。他の集団と比較して目立つのは、HYKの類型4(61.5%)と、HYCの類型2(50%)である。母数が少ないので断定はできないが、HYKは、原話のより具体的な展開部の話段3の情報を開始部とし、HYCは、原話の全体構造を再構成してまとめた情報を開始部とする傾向が認められる。

【表3】要約文HYの開始部の類型の内訳

開始部	全体	HYJ	HYK	HYC	全体	HYJ	HYK	HYC
1	18(37.5%)	11(47.8%)	2(15.4%)	5(41.7%)	16(33.3%)	7(30.4%)	8(61.5%)	1(8.3%)
2	13(27.1%)	4(17.4%)	3(23.1%)	6(50%)				
3	1(2.1%)	1(4.3%)	0(0%)	0(0%)				
4	10(17.4%)	4(17.4%)	5(38.5%)	1(8.3%)				
4a	6(13%)	3(13%)	3(23.1%)	0(0%)				
計	48(100%)	23(100%)	13(100%)	12(100%)				

横軸の3つの文字列について、Hは講義の種類(講義H)、Yは理解データの
 種類(要約文)、J,K,Cは母語(日本語、韓国語、中国語)を表している。

次の【表4】は、縦軸に終了部の類型番号を、横軸に被調査者の集団を配置した表である。類型1, 2, 3は、下位区分があるため、右にそれぞれ集計したものを示した。

【表4】 要約文HYの終了部の類型の内訳

終了部	全体	HYJ	HYK	HYC	全体	HYJ	HYK	HYC
1	9(18.8%)	4(17.4%)	4(30.8%)	1(8.3%)	16(33.3%)	7(30.4%)	6(46.2%)	3(25%)
1.1	7(14.6%)	3(13%)	2(15.4%)	2(16.7%)				
2	4(8.3%)	2(8.7%)	0(0%)	2(16.7%)	5(10.4%)	4(17.4%)	0(0%)	1(8.3%)
2b	1(2.1%)	1(4.3%)	0(0%)	0(0%)				
3	5(10.4%)	5(21.7%)	0(0%)	0(0%)	13(27.1%)	10(43.5%)	1(7.7%)	2(16.7%)
3a	3(6.3%)	2(8.7%)	1(7.7%)	0(0%)				
3.1	4(8.3%)	2(8.7%)	0(0%)	2(16.7%)				
3.1a	1(2.1%)	1(4.3%)	0(0%)	0(0%)				
4	2(4.2%)	0(0%)	1(7.7%)	1(8.3%)				
5	12(25%)	2(8.7%)	5(38.5%)	5(41.7%)				
計	48(100%)	23(100%)	13(100%)	12(100%)				

まず、全体についてであるが、類型1と類型3が約30%と多い。他の集団と比較して目立つのは、HYJの類型3(43.5%)それからHYKの類型1(46.2%)である。母数が少ないので断定はできないが、HYJは、原話のより具体的な展開部の大話段4と大話段5のまとめの情報が残存する終了部となり、HYKは、原話の展開に沿った話段5のまとめのみの情報が残存する終了部となる傾向が認められる。

(2) 講義の談話に特徴的な話段の情報がどのように要約文に表現されるか

講義Gのある現象を具体例とともに説明する話段の6.6が要約文に残存する場合、「概略 詳細」の観点から類型化した結果、3種の集団のパラフレーズ全体的な傾向は、次の3点である。

GYJには、話段6.6「年代による親族呼称の変化」という大きな話題を【5. 提題表現】でとりあげ、年代による親族呼称の変化の男女差を「女性の方が変化が遅い」と具体的に説明し、「それは～{から/ため}だと考えられる」という【12. 反復表現】の【5. 提題表現】+【4. 引用表現】の【1. 文末叙述表現】で、変化の2つの理由を述べるという特徴がある。

GYKは、男性と女性を対比的に【5. 提題表現】や【6. 状況表現】で話題としてとりあげ、具体的な親族呼称を挙げながら男女に差があることを説明し、「{こ/そ}れは～{から/ため}だと考えられる」という【12. 反復表現】の【5. 提題表現】+【4. 引用表現】の【1. 文末叙述表現】で、2つの理由のうち1つを述べるという特徴がある。

GYCは、【2. 節末叙述表現】によって親族呼称を使用する人の年代を設定していき、具体的な親族呼称を挙げて呼称の変化を説明して、男女差があることを明示せず、変化の理由も述べないという特徴がある。

これらの特徴は、日本語母語話者の要約文は2レベルまでの中間的なレベルのパラフレーズが多いのに対し、韓国語母語話者と中国語母語話者(特に中国語母語話者)の要約文は3レベル以降の詳述的なパラフレーズが多いことに起因すると考えられる。

先行研究の原話のどの情報が要約文にどのくらい残存するのかといった分析方法から、要約文の大文段を認定して、開始部と終了部に原話のどの情報がどのように残存するのかを分析する方法を採用することで、要約文の表現から受講者がどのように膨大な講義の談話の情報をパラフレーズして理解しているかの一端を明らかにすることができたと考える。

【引用文献】

- 佐久間まゆみ編著(1989)『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版
 佐久間まゆみ(2007)「第11章 日本語母語話者による講義理解の分析方法」西條美紀研究代表者『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』平成16-18年度科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(C), pp.119-147
 佐久間まゆみ研究代表者(2015)『大学学部留学生による講義理解の表現類型に関する研究』早稲田大学2014年度特定課題研究助成費(A)(一般助成)研究成果報告書

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------